

天眼鏡

近づくか「クリーンミート」の時代

このところ新聞や雑誌で「人工肉」「植物肉」等についての記事を見かけることが増えてきた。そうした中、『クリーンミート〜培養肉が世界を変える』（日経BP発行）なる衝撃的な本が本年1月に発行されている。クリーンミートによって「私たちの食料生産方法に、約1万年前の農業革命以来、最大の変革が起きるだろう。」ことを叫ぶ。

著者はポール・シャピロで、「動物愛護の組織『Compassion Over Killing』」の設立者。また最近『動物愛護の殿堂』入りを果たした。日刊紙から学術雑誌に至るまでさまざまな媒体で、動物に関する記事を多数発表している。」と紹介されている。これだけ見れば動物愛護運動の世界のリーダー的存在であり、動物愛護の哲学を一方的に語るだけの人物と理解しがちであるが、本書の序文を、世界的ベストセラーとなった『サピエンス全史』の著者ユヴァル・ノア・ハラリが書いていることが示すように、世間ではかなり高い評価を獲得していることが推測される。本書の内容からしても、研究・技術面にも詳しく、それらの進展・歴史とともに関連する業界にも相当に精通していることが伺われ、その見解なり主張を無視したり軽視することは適切ではないようだ。

本書によれば、現状では肉には三つに分けて整理され、家畜によってもたらされる現状の肉＝「ミート」と、大豆等を原料にして製造される「フェイクミート」、そして培養肉である「クリーンミート」となる。

植物由来のフェイクミートは、今ではアメリカのほとんどの大手スーパーで販売されるようになっており、「もっとも頑固な肉好きの舌をもしばしば欺くほどの味になっている」とはいえ、現状、アメリカにおける食肉市場に占めるフェイクミートのシェアは1%未満にとどまるが、乳製品を含まない液状ミルクでは既に10%を超えていることもあり、フェイクミートが大きなシェアを確保するようになるのも時間の問題だとし

ている。

このフェイクミートはどんなにおいしくなっても所詮は疑似食品であって代替品にとどまり、本物ではないのに対して、クリーンミートはごく少量採取した動物の筋細胞から生体外で筋組織をつくるもので、あくまで「正真正銘の畜産品」なのだというのが本書の基調をなす。

ところで何故フェイクミート、クリーンミートが必要とされ、熱心な研究開発と商品化が急がれているのか、その理由に注目を要する。現在の畜舎で飼育し穀物飼料を供給する「工業型畜産」は、効率性と利益の最大化の追求によって、1) 穀物を飼料として家畜に供給することによる先行きの食料需給のひっ迫、2) 運輸部門全体に匹敵する大量の温室効果ガスの排出、3) 排泄物による土壌や水質汚染、4) 抗生物質とワクチン使用にともなう空気、土地、海の汚染発生と高い伝染病リスク、等、たくさんの問題を抱え持続的でない。そしてとりわけ「動物に与える苦痛の総量からすれば、工業的畜産は間違いなく、史上最悪の犯罪のひとつに数えられるだろう。」としている。

これをクリアするのがクリーンミートで、商業販売までには生産コストの引き下げと消費者の支持を得られるかが大きな課題となるが、既に「叫べば届く」ところまで来ているという。クリーンミートとその背景をどうとらえるかは人によって区々であろうが、目下、たくさんの投資家はその動向に注目し、これに投資しようとしているという事実を認識しておくことは不可欠だ。そして現行の畜産が抱える多くの問題に本格的に対処していかなければ、畜産の場を農場から工場へと移行させようとする流れを阻止していくことが容易でないことは確かだ。一読して将来に考えをめぐらすことが必要だ。

（農的社会デザイン研究所 葛谷 栄一）